とやま日季（にっき）

つくる、つながる、とやまの暮らし

2017 夏秋

とやま暮らしの話
とやまの呼吸：富山県美術館
とやまの始点：内藤廣氏×佐藤卓氏×石井隆一富山県知事
今日の朝ごはん
おでかけリポート
Toyama Navi
とやまの品：Oriiの色の世界

くらしたい国、富山

《とやま暮らしの話》

富山県・中新川郡（なかにいかわぐん）上市町（かみいちまち）在住
大自然の懐で、坂本さん家族の、のびのび育てる暮らし

富山県東部、剱岳の麓に広がる上市町。北アルプスの雄大な山々を仰ぎ、豊かな自然と水に恵まれた地。このまちに暮らすのは、坂本龍生さん、恵美さん夫妻と、孔生（こうき）君、政慈（せいじ）君兄弟。東京から龍生さんの両親の故郷である富山県に、２０１４年に移り住んだ。

龍生さんは愛媛県松山市で育ち、高校２年のときに、父の赴任先の山形県へ。その後、東京大学理学部に進学し化学を専攻した。同大大学院を修了後、都内の日立グループで、ユビキタスネットワーク事業やセンサーネットワーク事業に携わった。

龍生さんは29歳のとき、学生時代から好きだった舞台の世界へと大転身を図る。舞台制作の会社に転職し、有名俳優のマネージャーを務めたり、公演で全国を旅する多忙な日々を送る。そんな中で出会ったのが、舞台照明の会社に勤務する東京出身の恵美さんだった。↖

写真左より時計回りに、眼目山立山寺の並木道、剱岳。大岩山日石寺周辺には名物のそうめんを出す店が数軒ある。

さかもとりゅうせい／富山県出身の両親のもと、愛媛県で育つ。高校２年から山形県へ。東京大学理学部で化学を専攻し、同大大学院修了後は日立グループの企業でシステム開発を担当。29歳で舞台制作の会社に転職し、全国各地を旅する。子育てを考え、2014年に上市町に移住。滑川市の企業で人材育成とアロマ事業に携わる。妻の恵美さん、息子の孔生君、政慈君との4人暮らし。

上市町：富山県東部の中心に位置し、剱岳を望む自然豊かなまち。人口は約21,000人。富山市、滑川市、魚津市、黒部市、立山町などに隣接し、車での移動も便利。剱岳登山の拠点であり、歴史ある寺院が残る。

●写真・右：自宅は広々とした町営住宅の一角にある。　●左：自宅での坂本さん家族。

↙ある日、仕事で失敗した龍生さんに、優しく接してくれたのが恵美さん。「彼女は上司から、取引先に丁寧に接するように言われていただけなのに、僕が勘違いして、好きになったんですね（笑）」

２０１０年に入籍し、翌年には孔生君、14年には政慈君が誕生。一方で、全国の文化会館を巡回する舞台の現場制作と、翌年の公演の営業をかけもちする、面白くも、慌ただしい毎日がつづいた。

「子どもがいると、さすがに月単位で家を空ける生活に疑問を覚え、子育てのために、田舎に行きたいと思うようになりました。場所も、両親は山形で、親戚は皆、富山ということもあり、いろいろ考えました。そんなとき、人材育成の会社を経営する従兄弟が、富山ならではの新規事業を始めたいからと、声をかけてくれたのです」

８年勤めた会社を辞め、龍生さんは滑川市の会社に転職。その会社がアロマ事業を隣の上市町で立ち上げることになり、家族は上市町役場から紹介された町営住宅に入居。メゾネット型２階建ての２ＬＤＫで、親子４人には十分な広さ。車を気にせず遊べる芝生の広場もある。兄弟が、近所の子どもたちと、のびのび駆け回れる最高の環境だ。

●写真・右：坂本さんが勤務する滑川市の株式会社プロジェクトデザインで。カードゲームを使った人材育成や研修などを手がけ、坂本さんは商品開発を担当する。最近ではアロマの分野にも進出。　●左：滑川市の職場のすぐそばにある、富山県産農産物直売所＆カフェの「とみや」。農家直送、減農薬・無農薬・有機栽培・自然栽培の野菜の直売所であり、それらを使ったヘルシーなランチがおいしい。
とみや 富山県産農産物直売所＆カフェ　定休日：日祝　TEL.076-482-3379
http://www.tomiya-t.com/

現在、龍生さんは自宅から車で15分ほどの会社に勤務する。企業の人材育成のための体験型ゲームを開発しながら、アロマ事業にも携わる。人材育成事業の顧客は、日本を代表する大手企業をはじめ、規模も業種もさまざまで、仕事のやりがいも大きい。同僚は、東京からUターンした人も多いが、ワークライフバランスが重視され、皆、プライベートの時間を大事にしながら働けているそう。

「当社の代表には、地方でも豊かに暮らせるモデルにしたいという強い思いがあり、皆それぞれのライフスタイルに合わせて働いています。僕の場合、仕事は朝8時半から夕方5時半頃まで。仕事の後は子どもたちを保育園に迎えに行って、夕飯を一緒に食べ、9時頃にはもう寝ています。土日には、人材研修やアロマ体験の仕事が入ったり、家で仕事をすることもありますが、基本的に残業は年に数時間程。東京で働いていた頃は、終電で帰ることも多かったので、振り返ると、我ながら体力がよく続いたなと思います」

会社の近くには、気軽にヘルシーなランチが食べられる「とみや」というカフェもある。家族との時間、健康的な暮らしは、何にも代え難いものとなっている。

●写真・右：坂本さんが手に持っているクロモジは、爽快感のある香りで人気。化学合成していない、純国産の精油は評判が良く、定期的に開催する体験会に多くの方が参加。富山の森林の資源を活かしながら環境を守り、雇用も創出する事業として、少しずつ育てていきたいと坂本さんは語る。　●左：上市町にある森林組合の建物の一角にある工場で、間伐材のタテヤマスギやクロモジ、ヒノキ、ヨモギなどから精油を抽出する。　AROMA SELECT　https://aroma-select.jp/

富山県の森林面積は全体の約7割。立山連峰などの山々に積もる雪が、雪解け水となって森を育て、田畑を潤し、富山湾へと注ぐ。森と大地と海を水が循環するなかで、豊かな生態系、植生が育まれ、富山県では暮らしの中で四季の変化を楽しめる。

坂本さんの会社では、立山山麓森林組合・上市支所の一角に工場スペースを設け、森林育成のために切られるタテヤマスギなどの間伐材や、クロモジなどの低木、地元の福祉施設の皆さんが摘むヨモギなどから精油を抽出し、製品化。オリジナルブランド「アロマセレクト」の商品は、インターネットのほか、D&DEPARTMENT TOYAMA、東京の日本橋とやま館など県内外のショップでも販売。坂本さんのオフィスでも使われているが、クロモジなどの爽やかで深みのある香りには、高いリラックス効果がある。

坂本さんは、工場では自ら材料を刻み、精油の抽出や分析も行う。そこには、大学での化学の知識も活かされている。

「ものをつくるのは面白いですし、体験会では県内外からお越しのお客様の顔を見られるのも楽しみであり、やりがいです。富山ならではの事業として、成長させていきたいですね」

●写真・右：上市町はアニメ映画『おおかみこどもの雨と雪』の細田守監督の故郷。劇中の家族が暮らす「花の家」のモデルとなった、大きな古民家で遊ぶ坂本さん家族。個人宅だが、一般に開放され見学できる。 公開時間：9時～17時　富山県中新川郡上市町浅生18　http://ookamikodomonohananoie.jp/　●左上：おおかみこどもの花の家外観。　●左：鉄道王国とも呼ばれる富山の田園地帯を走る富山地方鉄道の電車。電車が大好きな兄弟のため、電車を見に出かけたり、実際に乗って遠出することも。

東京にいた頃とは、まったく違った環境で子育てをする坂本さん家族。「ご近所には2人、3人とお子さんがいる方も多く、ここでは少子化は感じないですね（笑）」。その言葉通り、保育園から帰宅するとすぐに、近所の子どもたちが元気な声で、兄弟を呼びにやってきた。

富山に移住して約3年。家族の時間ができたのはもちろん、家賃も安いため、経済的にも余裕が出たという。また、人間関係の面でも、心配していたような、田舎特有の濃密さは求められなかった。

「実はこちらに来た翌年、息子がくじを引いてしまい、自治会の会長をやったんです（笑）。仕事で参加できないことも多かったのですが、たまに行くと皆さん、良く来たねと温かくて。ほどよい人間関係が、ちょうどいいなと思いますね。

それに、富山は野菜も魚も、基本的に食材のレベルが高く、どれも新鮮でおいしい。朝獲れのホタルイカ、刺身もよくいただきます。何より、家族いっしょに夕飯が食べられる暮らしが、しあわせなことだと実感しています」

仕事と家庭生活のバランスが取りやすい富山での暮らし。大自然の麓には、家族との時間を大切にしながら、子どもも大人も成長していける場所がある。＊

1

2

3

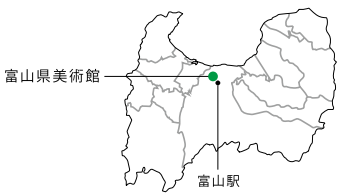
とやまの呼吸

アートやデザインは、肌で感じるもの。

アートとデザインをつなぐ世界でも稀な美術館として、今年8月26日に全面開館した富山県美術館。国内屈指の20世紀美術のコレクションのほか、ポスター、椅子のコレクションも、これまでと違った展示方法で新たな魅力を見せている。

富岩（ふがん）運河環水公園の西地区に建つ富山県美術館は建築家の内藤廣氏が設計し、富山のアルミ、氷見の里山杉などの県産材を豊富に使用している。地上19ｍの屋上には、子どもたちが遊べる屋上庭園「オノマトペの屋上」がある。360度のパノラマを満喫しながら、元々この地にあった「ふわふわドーム」のほか、グラフィックデザイナーの佐藤卓氏が手がけた「ぷりぷり」「うとうと」などでもアートとデザインに触れ合える。

ワークショップなどが行われるアトリエや、図書コーナー、カフェ、レストラン「日本橋たいめいけん富山店」もある。好きな作品、風景、居場所を見つけながら、のんびり過ごす一日が楽しい。



11月5日（日）までは、開館記念展Part1「生命と美の物語 LIFE ― 楽園をもとめて」を開催中。アートの根源的なテーマである「生命＝LIFE」を「『すばらしい世界＝楽園』をもとめる旅」ととらえ、ルノワール、クリムト、ピカソほか、国内外の美術館コレクションの優品を中心とした約170点を紹介。

㊟富山県美術館　Toyama Prefectural Museum of Art and Design　略称TAD（タッド）　〒930-0806 富山県富山市木場町3-20　TEL.076-431-2711　http://tad-toyama.jp/

1：外観。美術館横の階段からも2F、3F、屋上に行ける。2F屋外広場では三沢厚彦氏による「クマ」がお出迎え。　2：屋上庭園「オノマトペの屋上」。大パノラマが広がるなか、アート作品でもある遊具で遊ぼう。　3：アトリエ。子どもから大人まで参加できるワークショップや、作家の公開制作も行われる。　4：3F。館内からは環水公園や、よく晴れた日には立山連峰を望むことができる。　5：ポスタータッチパネル。ポスターコレクション約13,000点のうち3,000点を自由に検索・閲覧できる。　6：ホワイエ。広々とした空間では、イベントなども行われる。

石井隆一富山県知事の
とやまの始点

ゲスト＝

内藤廣氏　佐藤卓氏

建築家　　グラフィックデザイナー

富山県美術館を設計された内藤廣氏、屋上庭園「オノマトペの屋上」をデザインされた佐藤卓氏、そして、石井隆一富山県知事が、同美術館の魅力や特徴、今後の展望・可能性などについて語り合いました。

場のちからを生かす

石井　富山県美術館は、本年3月25日に一部オープンの後、本日4月29日、屋上庭園「オノマトペの屋上」が開園しました。そして8月26日に全面開館の日を迎えます。

富山市西中野にあった富山県立近代美術館は、昭和56年のオープンから36年が経過し、耐震性の不足や消火設備が水冷式などの問題があったことから、数年前より移転・新築を検討していました。移転先の場所については、種々検討のうえ、交通の便がよく、景観も素晴らしい富岩運河環水公園の西地区の高台が、県有地でもあり、適切ではないかということになりました。ただ、そのときに課題だったのは、この高台にあったふわふわドームが子どもたちにとても人気があり、これを残せないかということでした。4年前の秋、黒部市での「とやまっ子みらいフェスタ」の会場で、小さなお子さんを連れたあるお母さんから「美術館の環水公園への移転新築は、富山駅から近いので行きやすくなってうれしいが、この子が大好きなふわふわドームは、ぜひ残してほしい」とご要望をいただいたこともありました。

そこで、このふわふわドームをうまく活かした設計ということも条件の一つとしてプロポーザルを実施し、著名な建築家の方々からの18に及ぶ提案について審査会で議論していただいた結果、内藤廣さんの設計案が最も素晴らしいとされ、お願いすることになりました。内藤さんは、最近、『場のちから』という本も出され、建築は根無し草になってはいけないとされていますが、今般は、まさにこの場の魅力をすごく活かした素晴らしい建築にしていただいたと感じます。

内藤　建築家は、何かを提案するときに、最初に敷地と出会います。こちらに来た時、晴れていたこともあり、もともとあった小山の上のふわふわドームで子どもたちが楽しそうに跳ねていて、お母さん方がそれを眺めていた。その向こうに立山が見え、反対側には神通川が見える。これは素晴らしい景観だなと思い、壊すことよりも、この全体をより満喫できるような場所をつくりたいと考えました。新しい建物の屋上で子どもが跳ねるというのも、なかなかいいなと。今日は、それが実現したような気がしてとてもうれしいです。

石井　佐藤さんは、「場のちから」についてはどうお考えですか。

佐藤　だいたいすべての仕事に対して、自分からは何も持っていく必要はなくて、「場のちから」、既に、そこに価値があることが多いと思っています。ですので、価値をそこで生み出すとか、与えるなどというのは、本当におこがましく感じています。

石井　内藤さんが富山県美術館を設計するにあたり、工夫された点や苦労された点についてお聞かせいただきたい。

内藤　この富山県美術館は、環水公園を座敷とすると奥の床の間に当たる場所に立地しています。美術館は文化の卵みたいなものです。ですからこの計画では、環水公園の環境を受けとめる放物線に抱かれるように楕円の形をしています。また、建物を立山に向かわせたいと考え、立山と並行にその形を切り落としました。立山をリスペクトし、立山に向かう強い意志を表現しました。

（左から）内藤氏、佐藤氏、石井知事

東側の大きく開かれたガラス面や、屋上のテラスは立山に向かっており、立山の絶景を受けとめるようになっています。

石井　内藤さんは、環水公園の方から来て、いたち川から神通川寄りに美術館の外周をぐるっと回って屋上に上がっていく回廊のようなルートも作られた。この点も素晴らしいなと思います。

内藤　屋上には美術館の中からも行けますし、エレベーターでも上がれますが、天気のいいときは、外を回っていただくと、まずは、三沢厚彦さんのクマの彫刻に出会い、さらに放物線上の外周の階段を上って行くと、富山の全景が見える屋上にたどり着きます。自然に屋上に誘われて行くと、子どもがふわふわドームの上で跳ねていたり、佐藤さん作の遊具で戯れていたりと、とても面白いと思います。

世界初　屋上の遊び場「オノマトペの屋上」

石井　佐藤さんには、屋上庭園をデザインしていただきましたが、美術館の屋上が、このように、子どもたちの遊ぶ場になっているというのは、多分、世界でも初めてではないかとおっしゃっていましたね。

佐藤　はい。私が知る限り、初めてだと思いますね。

石井　その「オノマトペの屋上」のコンセプト、工夫された点などを伺いたいと思います。

佐藤　私が元の地面にあったふわふわドームを最初に訪れた際は、内藤さんの時とは違い、強風・大雨でした（笑）。訪れて感じたのは、ふわふわドームという名前が面白いなと。ふわふわってオノマトペ（擬音語・擬態語）じゃないかと。ＮＨＫのＥテレの「にほんごであそぼ」という番組に参加し、そのなかで、たまたま日本語の豊富なオノマトペを映像にしていたこともあり、「オノマトペの屋上」という名前は、すぐに頭に浮かび、これしかないと思い、ご提案しました。子どもたちが大好きな「ぷりぷり」とか「ひそひそ」とか、そして、たくさんのオノマトペからどんな遊びが考えられるか、スケッチを描き、できるだけ種類が違うものを選びました。

　実際に遊具を制作するにあたっては、大人が本気でつくることが、すごく重要です。オノマトペの屋上の遊具はつるつるの曲面が多いのですが、あれは人の手で、紙ヤスリで撫でて原型をつくっています。ＮＨＫの番組もそうなのですが、子どもの遊び道具だから、こんなものでいいだろうというつくり方では、子どもは見抜きます。子どもは言葉にできなくても、ちゃんと感じていますので、絶対に手を抜かず、大人が本気でやっているところを子どもたちに見てもらい、楽しんでいただきたいですね。

アートとデザインをつなぐ美術館

石井　近代美術館の開館時には、富山県が生んだ日本を代表する美術評論家であり、シュルレアリスムなどにご造詣が深く、詩人でもいらした瀧口修造さんに、いろいろなご助言をいただきました。そういった経緯もあり、富山県美術館では、瀧口さんの実績だけでなく、

人物やその心についても県民や多くの皆さんに改めて知ってもらうため、瀧口さんのコレクション展示室を設けました。瀧口さんが親しくお付き合いされていたジョアン・ミロ、ジャスパー・ジョーンズ、草間彌生など、多くの芸術家から瀧口さんに贈られた約７００点の作品や書簡を、入れ替えて展示することにしています。

また、晩年を立山山麓で過ごされた世界的音楽家のシモン・ゴールドベルクさんについては、奥様の山根美代子さんが亡くなったとき、ゴールドベルクさんが生前所蔵し、大変愛しておられた美術品19点を近代美術館に寄贈していただきました。そのなかには、マリノ・マリーニの彫刻やコンスタン・ペルメーケの絵など、すばらしいものがあります。美術館はただ美術品を鑑賞するというだけではなく、ときには音楽やほかの芸術とのコラボがあっていいと考えていますので、シモン・ゴールドベルクさんのコレクションの展示室も設けています。

そして、これまで近代美術館になかった藤田嗣治の絶頂期とされる乳白色の時代の「二人の裸婦」という作品が入手できる予定です。欧米でも一流の品格のある作品として評価されており、よくぞ手に入ったともいえます。

内藤　そうですか。それはすごいですね。

石井　富山県美術館は、これら20世紀の美術を大事にしていこうという流れとあわせ、近代美術館の初代館長、小川正隆さんがデザインの重要性をいち早く認め、インダストリアルデザインの代表である椅子や、グラフィックデザインの代表であるポスターを収集し、世界の五大ポスター展の一つとされるポスター・トリエンナーレを開催してきたことなども引き継いで、アートとデザインをつなぐ場にしたいと考えています。

また、元文化庁長官の青柳正規さんや三宅一生さんも、かねて国立のデザインミュージアムを作るべきと提唱されており、内藤さんや佐藤さんも応援されています。富山県美術館がアートとデザインをつなぐ美術館を目指すことに関して、配慮や工夫をされた点をお伺いします。

内藤　美術とデザイン、そして、子どもをどうやって組み合わせるかというのは、今回の大テーマでした。元々、美術・アートは、人の心の中のことなのに対し、デザインは、他人とどうつながるかという、外に向かうものです。富山県美術館の２階には、心の中を見つめ、感じ取る20世紀美術。そこには悩みとか喜びとかいろんなものが含まれている。そして、それを他人とどう共有し、伝えるかというのはデザインの役割ということで、３階をデザインにしています。さらに、それらを未来に対して拓いていくためには、子どもたちですよね、ということで屋上につながる。この組み合わせは、なかなかうまくいったのではないかと思います。こんな３点セットを持った美術館は世界にはありません。

また、いまこそ、デザインとアートが出会って、それぞれ新しい未来を拓くときではないかなとも思っています。いまのデザインが持っていないものをアートが持っていますし、アートに欠けているところをデザインが持っています。それぞれが刺激し合って、未来に向かっていく。そういう精神がここで育まれると、素晴らしいなと思っています。

富山県美術館のこれから

石井　デザインという言葉は、明治期以来、意匠とか図案といった狭い意味で使われることが多かったのですが、内藤さんや佐藤さんは、最近、例えば環境デザイン、都市デザインといった言い方がされるように、「人間がもっと心地よく生活できるようにはどうあるべきなのか」といった視点も含めた広い概念でお話をされています。ちなみに、アーティストは或る意味で問題提起者で、デザイナーはその問題を受け止め、伝え、共有し、或いは解決するのが仕事だ、とおっしゃる方もおられます。それによって、人々の心が美を感じ安らぎを得る、爽やかな気持ちになったり元気をもらったりするということでしょうか。今後の富山県美術館のあり方について佐藤さんのご意見をお伺いします。

佐藤　美術館はたくさんあるのですが、日本には国立のデザインミュージアムがありません。ちなみに、ロンドンやニューヨークにはデザインミュージアムがあります。これだけデザインが世の中にあるなかで、日本のデザインが、どのように時代とともに歩んできたのかを整理して、後世に残す国立のデザインミュージアムは、絶対にあった方がいいと思います。

富山県美術館は、アートとデザインをつなぐ場を目指しておられ、デザインをあえて掲げたわけですが、これはすごいことだと思います。一方で、デザインと言った以上、これからこの美術館でどういうことをして、どういう展覧会を開催できるのかを考え続けていく覚悟をする必要がある。その覚悟が、アート＆デザイ

ンのデザインにあるわけですね。

それから、アートとデザインの両方の視点を持っているということは、富山県美術館のすごく個性的なところです。よく例に出すのですが、尾形光琳の「紅白梅図屏風」という有名な屏風は、いまは美術品として取り扱われています。しかし、当時は部屋の間仕切りですから、インテリアだったんですね。必要がなくなったら、ぱたっと閉じてしまっておける。空間デザインをつくる、すごいプロダクトデザインです。つまり、「紅白梅図屏風」は、見方を変えると、デザインそのものともいえます。

ということは、一つのものを美術の視点でも、デザインの視点でも見られる。これは、絵画もそうで、例えば、宗教絵画は、絵画である一方で、教会に来た人の思いをどのように受け止めて、多くの人たちに伝えようとしているかという視点で見れば、コミュニケーションデザインとしても捉えられます。その2つの視点で、分析したり、楽しんだりすることができる美術館は、多分、いままで世界になかったはずで、本当に可能性のある、素晴らしい提案だと思いますね。

内藤　この富山県美術館の大きな特徴は、ゼロの状態から新しい美術館をつくるということではなく、ずっと育ててこられた20世紀美術のコレクションや、椅子とポスターのコレクションなど、すごい素地があるということです。その歴史と蓄積の上に立ってアートとデザインの美術館をつくろうというわけですから、なるべくしてなったという、素晴らしい美術館だと思います。

それから、富山出身の瀧口修造さんは、戦後、実験工房というグループを結成し、武満徹や、山口勝弘などが参加して、アート、デザイン、音楽など、それぞれの枠を超えて活動されました。六十年代の文化をクロスオーバーさせた中心人物です。瀧口さんの展示室ができるのも、まさになるべくしてなった企画です。外から見ると、とても新しく、誰も考えていなかったものというように見えますが、じつは、美術館の歴史のなかで培ってきたことが形になったと見ていただければうれしいです。

石井　デザイナーの三宅一生さんも、富山県美術館のアートとデザインをつなぐというコンセプトに大変感動され、ぜひ、協力したいということで、現在、スタッフのユニフォームを、いわばボランティア的にデザインしていただいています。去る2月に、とても素敵な試作品の発表が東京でありましたが、8月26日の全面開館の際、正式発表になります。雪山館長や学芸員、さらに、三宅さんの志、情熱のこもったユニフォームを着たスタッフが多くの県民や子どもたち、観光客の方々とも対話しながら、この美術館を盛り上げていく日が来るのが楽しみです。他方で、県民や関係の皆さんのご期待に応えていく上での責任も感じます。館長をはじめ現場の皆さん、さらに私どもが真摯に努力することはもとより、今後、お二人をはじめご見識、お志のある各界の皆様や、幅広い県民の皆様のご支援、ご協力をいただきながら、みんなでこの美術館を立派に育ててまいりたい。本日はありがとうございました。

鼎談日　2017年4月29日

内藤 廣　ないとう・ひろし ／ 建築家

76年、早稲田大学大学院修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て、81年、内藤廣建築設計事務所設立。作品に、海の博物館、牧野富太郎記念館、安曇野ちひろ美術館など。01年〜11年、東京大学大学院教授・副学長。11年より東京大学名誉教授。07年〜09年、グッドデザイン賞審査委員長。

佐藤 卓　さとう・たく ／ グラフィックデザイナー

81年、東京藝術大学大学院修了。株式会社電通を経て、84年、佐藤卓デザイン事務所設立。ロッテ キシリトールガム、明治おいしい牛乳など、商品や企業のイメージ戦略に多数携わり、富山県美術館開館ポスターをデザイン。NHK Eテレ「にほんごであそぼ」アートディレクター、「デザインあ」総合指導、21_21 DESIGN SIGHTディレクターおよび館長。

石井 隆一　いしい・たかかず ／ 富山県知事

東京大学法学部卒。石川県、北九州市、静岡県などを経て、地方分権推進委員会次長、自治省財政担当審議官、総務省自治税務局長、消防庁長官などを歴任。04年より現職。03年から06年まで早稲田大学大学院客員教授。主著に「『元気とやま塾』入門―高志の国と世界を結ぶ」「分権型社会の創造」など。

富山の達人たちのとっておきの朝

今日の朝ごはん

富山市 飯田健児さん

今朝のメニュー

実家で作ったお米のお粥に、つりやの「氷見コンカラー油」をのせて／セイズファーム産アローカナ鶏の卵のオムレツ／グリーンリーフとイチジク、キウイ、トマト、庭で育てたディル、ミントなどのサラダ ドレッシングはオリーブオイル、塩、赤ワインビネガーで／麦茶

道具を収納し過ぎない、見せるキッチン。毎朝7時が朝食の時間。料理家が身近にある食材で、手間をかけずおいしい料理をつくる姿に影響を受け、自らも実践中。セイズファームでは料理教室を開くことも。この日は、アリス・ウォータースのレシピ本を見ながら、アップルパイの下ごしらえもした。

いいだけんじ
富山県氷見市のワイナリー、セイズファーム取締役マネージャー。つりや企画室室長。大阪で生まれ育ち、富山市出身の父親の退職とUターンを機に、30歳のときに富山へ。持ち前の優れたセンスで、セイズファーム内の農園やレストラン、宿泊施設の運営や広報などをトータルにディレクションする。

全国から多くの人が訪れる富山県氷見市にあるワイナリー、セイズファームのマネージャーを務める飯田健児さん。飯田さんの住まいは、富山市内の中心部から少し離れた静かな住宅街にある。20畳ほどの広いリビングダイニングキッチンには、選び抜かれた道具や小物が並ぶ。古道具屋などで買い求めた好きなものをいつでも眺められるよう、ものを収納し過ぎない内装もお洒落だ。木製の家具は手づくりしたものも多い。「時間とともに変化する自然素材や、手入れしながら長く使える上質なものが好き」と語る。

兼業農家の実家はすぐそばにある。忙しい朝はいつも、手早く作れるものを準備。食べ盛りのお子さんのため、今朝は実家で作ったお米で、お粥をたっぷり炊いた。トッピングは、つりやの「氷見コンカラー油」。料理家のたかはしよしこさんと開発した逸品だ。こんか鰯のアンチョビをベースに、スパイス、ニンニク、ネギ、ショウガ、ゴマなどが配合された、台湾風の豊かな風味と辛さに食欲は増進。庭で育てたパクチーの白い花も添えた。器は氷見市在住の陶芸家、安藤由香さんのもの。オムレツにはセイズファームで育てているアローカナ鶏の新鮮な卵を4つ。サラダにはグリーンリーフのほか、キウイやイチジク、庭のディルやミントも加えた。いい匂いに誘われ、最近飼い始めた子猫のジャンゴも興味津々でのぞき込む。繊細な美しさのグラスは富山市のガラス作家、木下宝さんの作品だ。

飯田さん曰く、富山の食材はとても新鮮でおいしく、料理のしがいがあり、楽しいのだという。

「富山では旬を待ちこがれて食べる楽しみが多いですね。春はホタルイカ、夏は岩牡蛎、冬は寒ブリ、秋はワイナリーの葡萄の収穫があります。大阪は何でもある消費地ですが、富山は産地として、旬の食材を通じて自然との強いつながりを実感できる場所です」

セイズファームのマネージャーを務めて6年。信じたスタイルをぶれずに貫き、スタッフみんなで困難を乗り越え、ワイナリーを成長させてきた。ワインづくりと同様、季節の変化や旬を敏感に感じながら、それらを楽しむ日々にこそ、大きな喜びがあるに違いない。

伝統を背負った陶芸家の素顔は・・・

◎ 越中瀬戸焼

約420年の歴史を持つやきもの、越中瀬戸焼。この伝統を今に受け継ぐ、5人の陶芸家で結成されたのが「かなくれ会」です。作家さんってどこかナゾめいていますが、素顔は朗らかでチャーミング。写真は釋永(しゃくなが)由紀夫先生作の花器で、作品名は「ウエディング」。「先生、その心は？」「お嫁に来てこっちに住んで」ですって。そう言われると、花嫁さんのドレスのようにも見えますね。

日常を愉しむ富山人が案内します。

大切な場所 好きな時間

おでかけリポート

立山の夏は、夜空を彩る
打ち上げ花火のように
エキサイティング！

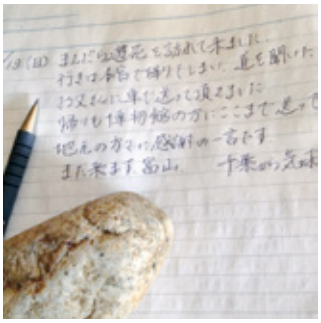
写真と文：立山町・高橋秀子さん

東京出身、地域おこし協力隊として富山県立山町に移住して3年目。移住希望者をサポートする定住コンシェルジュのかたわら、東京時代からの本業であるライター業も続けています。立山町の魅力はずばり立山連峰！　朝起きると、「立山の神様、おはようございます」とつぶやいて美味しいお水(水道水だけど)をゴクリと飲み干すのが日課です。

極楽往生を願い、橋を渡ったら救われる？

◎ 布橋（写真右：立山・芦峅ふるさと交流館提供）

緑の中に突如現れる、鮮やかな朱色をした布橋。私のお散歩コースかつ、癒しのスポットです。かつて立山が女人禁制だった時代、女性を救済するために行われた「布橋灌頂会(ぬのばしかんじょうえ)」の舞台でもあり、悩める女性たちが極楽往生を願ってこの橋を渡ったとか。この儀式、今年も9月24日(日)に行われます。かつて立山登拝する人に宿坊で出されたという精進料理もおススメ。



今日も立山線は走る、胸を張って堂々と

◎ 富山地方鉄道・立山線

車社会の富山ですが、日ごろは極力、立山線を使って移動しています。たった2両の車両だけど、胸を張って颯爽と走り抜ける姿は、日本の「漢」のごとくカッコいいのです。私が好きなのは通称「かぼちゃ電車」。ほっくりとした色合いがかぼちゃみたいでしょ？　千垣(ちがき)駅には、観光客が旅の思い出を記したノートが置いてあって、ページをめくると素敵な物語を感じるのです。

『ようことよしなに』©町田翠／小学館

お肌も蘇る？！マイナスイオンの滝パワー

◎ 称名滝

下界は暑いから、どこか涼みに・・・。そう思ったら落差日本一の称名滝へ。ドドドド～ッと迫力あふれる水煙を上げながら、一気に350メートル下まで流れ込む様はダイナミック。身体中にマイナスイオンを浴びたらお肌もつるぴかに！？イラストは立山町出身の漫画家、町田翠先生が描いた称名滝。立山町が舞台の漫画「ようことよしなに」(月刊スピリッツで連載中)が今、熱いのです！

訪れた人がもれなく喜ぶ、注文の多い洋食店

◎ レストラン「森の茶屋 糧(かて)」

昨年7月のオープン以来、マダムたちを中心にすっかり人気のお店。大きな古民家を贅沢に使った店内でいただけるのは、地元産の素材にこだわったシェフ渾身の洋食。おもてなし上手な女主人との会話も弾みます。イチオシは新鮮なお野菜がたっぷり盛られた立山ポークのサラダプレート。奥村さんのブルーベリーを使ったソースを添えて。シェフお手製のハード系パンもおススメです。

国際北陸工芸サミット 11月に富山で開催！

「THIS IS 工芸 ―伝える。創る。―」をテーマに、北陸の工芸の魅力を世界に発信する「国際北陸工芸サミット」を開催。11月16日（木）～23日（木・祝）をコア期間とし、富山県美術館をメイン会場に国際的なシンポジウムや展覧会など、多彩なプログラムで構成する。

INTERNATIONAL HOKURIKU KOGEI SUMMIT artisan crafts
国際北陸工芸サミット

㊐富山県生活環境文化部文化振興課　国際北陸工芸サミット開催準備担当
TEL.076-444-3436（直通）
国際北陸工芸サミット・ウェブサイト https://kogeisummit.jp/

富山くらし・しごと支援センターをご存じですか。

移住相談、富山県内での現地案内はもちろん、移住後の困りごとの相談も承ります。仕事面も経験豊富なキャリアカウンセラーが、就職決定までしっかりサポートします。とやま暮らしがいいなと思ったら、富山くらし・しごと支援センターへお気軽にご相談ください。

㊐富山くらし・しごと支援センター　◎有楽町オフィス（東京・有楽町／東京交通会館内）くらし TEL.080-8870-2456　しごと TEL.070-2798-7878　◎白山オフィス（東京・白山／東京富山会館ビル）TEL.0120-108-250　◎富山オフィス（富山駅前／パソナ・富山内）TEL.076-431-3691　http://toyama-teiju.jp/

富山米新品種「富富富（ふふふ）」の限定販売を行います。

昨年度、富山県が自信を持って発表した富山米新品種は、「富富富」という名称で平成30年秋にデビューします。富山の水、富山の大地、富山の人が育てた富山づくしの新しいお米です。県内では、土壌条件の異なる23ヵ所・約7.6ヘクタールの水田で、「富富富」の試験栽培が行われており、この新しいブランド米を、高品質かつ安定的に生産するために、富山県農林水産総合技術センターでは、日々、データ収集や実証研究を続けています。富山県のアンテナショップ（日本橋とやま館、いきいき富山館）では、平成30年秋のデビューに先立ち、10月16日から「富富富」を数量限定で販売いたします。詳細や最新の情報は、下記の専門サイトで発信してまいります。コシヒカリとは一味違う「富富富」のきわだつ旨みと甘み、香りを堪能され、「ふふふ」とほほ笑んでください。

㊐富山県農林水産部農林水産企画課　市場戦略推進班　TEL.076-444-3271
https://fu-fu-fu.jp　写真・右：富山米新品種名称発表会の様子。

富山県
とやま日季　2017年　夏秋号　2017年9月発行　企画・発行：富山県地域振興課　〒930-8501 富山市新総曲輪1-7　TEL.076-444-9605　FAX.076-444-4561
編集：北陸博報堂　取材・文：タダカツ　写真：室澤敏晴、東澤光明　デザイン：宮田裕美詠、柿本萌　印刷：とうざわ印刷工芸

Oriiの色の世界

有限会社モメンタムファクトリー・Orii　代表取締役の折井宏司さんは家業を守るため、26歳でIT関連の仕事を辞めて東京からUターン。仏像、美術銅器などの仕事が減少するなか、独自の着色技法で新しい色の開発に成功。以後、建築・プロダクトなどの分野で大きく躍進する。自身が好きなフッション、釣り、アウトドアなど、異分野とのコラボでも、おしゃれで、遊び心あふれるものづくりを楽しむ。ファッションブランド「アンリアレイジ」とのコラボでは、かっこいい現代の職人像を見せ、若者たちに大きなインパクトを与えた。伝統産業を変える、トップランナーのひとり。
TEL.0766-23-9685　http://www.mf-orii.co.jp/

かっこよく、職人像を変える。

目にも鮮やかで、深みのある複雑な金属の発色。若者にも人気のクラフト「ｔｏｎｅ」シリーズ。高岡銅器４００年の伝統の着色技法を元に、独自に進化させた新しい色やプロダクトの開発で注目を集めているのが、モメンタムファクトリー・Ｏｒｉｉだ。

同社代表取締役の折井宏司さんは、技術的に着色が難しいとされる、銅１００％の圧延板に、斑紋孔雀色、斑紋ガス青銅色といった新しい色の着色に成功。ニューヨーク国際家具見本市などへの出展以降、その豊かな色彩は国内外で人気を集め、ホテルや公共施設、レストラン、住宅などの内装に、Ｏｒｉｉマーブル、Ｏｒｉｉブルーと呼ばれる銅製品が数多く採用されている。また、ロングセラーのコースターなどのほか、オリジナルプロダクトも開発し、デザイナーの戸田祐希利さんを起用したブランド「ｔｏｎｅ」では、今春、シャンパンクーラーなど、シルエットが美しい新アイテムを発表した。「自分がやりたいと思う、カッコイイものづくり」を大切に、折井さんは職人のスタイルを鮮やかに塗り替えていく。